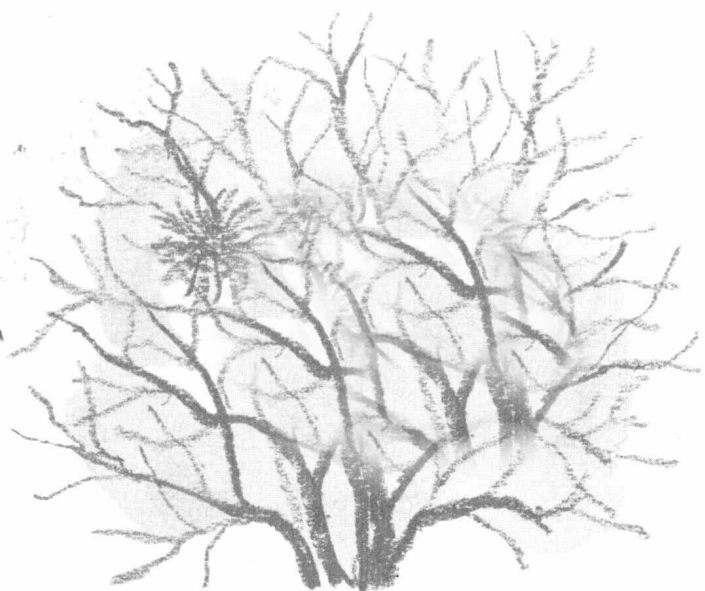


有情

有 うじゃう 情

丹羽文雄



新潮社版

止廢印檢

有情（うじやう）

昭和三十七年二月十一日 印刷
昭和三十七年二月十五日 發行

定價貳百九拾圓

著者 丹羽文雄

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京（341）六二二一
振替東京八〇八番

愚丁・落丁のものはお
取替へいたします。

印刷・二光印刷株式會社
© F. Niwa

製本・新宿加藤製本所
Printed in Japan

有
(うじゃう)
情

裝
幀

山
田

申
吾

二階から下りてくる私の心は、重かつた。私はこれからある人間に引導をわたさうとするのだ。息の根をとめるにひとしいことをやつてのけるのを、周囲が期待をしてゐる。が、私は引導をわたすほどの名僧智識ではない。それだけの智慧もなければ、行も、資格もない。いふならば、私はつねに引導をわたされる側の人間だ。階段のところでことさらスリッパの音をたてた。

三人の女が無言で私を迎へた。いつもならおしやべりの切れ目のない三人だが、深刻な事情のために、息をひそめてゐるやうであつた。引導をわたされる義妹の季子の正面に私はすわつた。四角な紫檀の卓を、それぞれとりかこむ形になつた。私は呼吸をととのへる必要があつた。正面の季子は面を伏せてゐる。そのやうすは、謙虚に話をきかうと氣持をしづめてゐるやうでもあり、馬耳東

風のしたたかなものを用意してゐるやうにもうけとれた。季子はすこしも怯える必要はないのだ。むしろひるんでゐるのは、ほかの二人の女であり、私であつた。が、二人の女は季子にとつて義姉であり、年齢もはるか上であつた。

「今度のことでは、一にも仙哉が悪い、二にも仙哉が悪い。仙哉のやつたことについては、辯護のしやうがない。その點については私たちはみんなあんたに同情をしてゐる。仙哉を責めてゐる。妻以外の女を愛し、しかも、その女に子供までまうけたのだ」

と、私は前置をいつた。季子はその事實を最近になつて知つた。が、私夫婦はずうつと前から仙哉の口からきかされてゐた。仙哉は、長姉には打ちあけてゐなかつた。次姉である私の妻と仙哉は二つしか年齢がちがはず、五人姉弟のなかでは、何かにつけて私の妻には話がしやすかつたやうである。何年か前、私は銀座の並木通りで義弟と偶然ゆきあつた。そのとき義弟は女をつれてゐたが、とほくから私をみかけると、女は反対側の舗道にうつり、仙哉だけが近づ

いた。はなれていつた女を無視して、私はしばらく仙哉と立話をした。義弟に戀人のあることはきいてゐたが、いまは紹介したくないのだらうと、その氣持をすなほにみとめてやることにした。が、子供ができると、仙哉は姉弟に祕密にしておくことがつらくなり、たれかに自分らのことがみとめてもらひたくなつたのだらう。女の方からいひ出したことかも知れない。日かげものの子を哀れと思ふやうになつた。姉弟のたれかがみとめてくれれば、日かげものといふことの心の負擔が、それだけでも軽くなり、すくはれると考へたからであらう。さういふ場合仙哉が心にうかべるのは、すぐ上の姉である私の妻だつた。もちろん私の妻は、弟を責めた。が、すべてはあとの祭であり、やむをえず妥協をした妻のところへ、仙哉が子供をつれてきた。私もその子供をみた。

「あのやうにいちらしい、罪もない子供をみてしまつては、もう私には何もいへません。目もとが仙哉そつくりです。神経質さうなところも、仙哉の小さいときにそつくりです。私の小さいときの寫眞によく似てます。あんなになつ

てゐる子供をひきはなしたら、どうなりますか」

生まれたときから不幸を背負つた幼い子の運命に、私は胸をしめつけられた。目の大きな、繊細な感じの、小さいくせに端麗な顔立が、いつそう哀れてあつた。年ごろになれば、すぐれた美貌が約束されてゐる。出生の事情がどうあらうと、幼い子の運命には無條件に手をかさねばならないのだ。妻はあらゆる攻撃の武器をとりあげられたやうであつた。自分の小さいときの顔に似た幼い子に、妻は負けてしまつたのだ。その後、二度女の子は私のうちにきた。一度は母親といつしよだつた。母親よりも父親を戀しがつてゐるふうだつた。いつもいつしよにゐられないせるもあるからだらうか、父親の首にだきついた。父親の腕の中で安心しきつた女の子をみてゐると、おのれの宿命の哀れさがすでにわかつてゐるらしかつた。父親を慕ふしぐさが異常だつた。

「良人が浮氣をして、ほかの女に子供をつくつた。世間にさらにある事件だ。さういふ事件を解決する方法も、またおのづときまつてゐる。金銭的に解決を

つけるか、子供をひきとり、女と手を切らせるか、解決方法はおよそきまつてゐる。しかし、今日あんたにきてもらつたのは、さういふ解決方法をすすめるつもりではなかつた。問題は、女の子の宿命にあんたも手を貸してもらひたいといふことだ。良人の浮氣を責めたり、相手の女を憎惡するのは、あんたとしては當然の感情だが、それを越えた解決方法をあんたに期待したいのだ。私も、その女の子をみた。その子はもう五つになつてゐる」

「もうそんなに大きいのですか。私はせいぜい今年生まれたぐらゐに思つてました」と、季子が顔をあげたが、すぐ目を伏せた。

左側の妻の姉の態度にも、おどろきの感じがあつた。妻は姉にはくはしいことを話してゐなかつた。

「生まれたばかりの子供だつたら、或ひは私の考へもまたちがつたかも知れない。しかし、その女の子はすでにおのれの宿命を感じてゐる。そのことを問題にしたいのだ。十分あんたと話合ひたいのだ。仙哉のことはしばらく措くとし

て、その女の子の運命を問題にしたい。さういふことがあなたに無理なことはよくわかつてゐる。結論をいはう。あなたにも、その子を哀れと思つてもらひたいのだ。仙哉がにくければ、その女もにくい。その子供もにくいだらうが、いまあの子を仙哉からひきはなしてしまつたら、どうなるか。死んでしまふだらう。あの女の子は父親だけで生きてゐるやうだ。子供といふものは、大てい雑草のやうにつよいものだ。その年ごろの子供はいたづらざかりで、親の手にあまるものだ。さういふ感じがその女の子にはまつたくないのだ。弱々しさうなからだだ。利口さうな目をしてゐる。大人の世界を敏感に感じてゐるのではないか。いかにも扱ひにくい子だ。私はこの事件を世間なみに、わりとあつさり解決がつくと思つてゐた。しかし、その女の子をみるに及んで、これは大へんなことになつた、へたをするとりかへしのつかないことになると思ふやうになつた。仙哉やその女を問題にするのでなく、女の子を中心に考へなければならぬと思ふやうになつた。仙哉は、子煩悩な人間だ。明や望をあんなに可

愛がつてゐる。あんたたちは最初の長女を死なせてゐる。仙哉がその女の子を可愛がるのも、死んだ女の子のことがいつも心のどこかにあるからではないかと思はれるくらゐだ」

「私は、その子をひきとつてもよいと考へてました。でも、そんなに大きくなくなつてゐるとは思はなかつたのです」

「それも一つの方法だ。しかし、あの子は母親の手もとにゐて、ときどき父親に會つてゐながら、すでに傷ついた小鳥のやうに、何となくおどおどとしてゐる。

元氣いつぱいの明や望といつしよにくらすやうになつたら、どうなることか」

その子を哀れと思ひ、みとめるとなると、仙哉の不倫を承認することになる。

私はそれを季子に強ひようとしてゐるのだ。妻の立場を無視し、いひ分を抹殺してかかるのだ。にくい女にできた子供が死なうと生きようと、季子のかまつたことではない。死んだところで、自業自得といふべきであり、悲しむのは仙哉である。仙哉がすべてをひきうけるのだ。そのため季子が傷つくことはない

のである。妻の座をまもるには、無慈悲にもならねばならないのだ。私たち夫婦ははじめから仙哉の味方に立ち、季子に分の悪い扱ひをしようとたくらんでゐた。私たちにはそれが眞實だつたからだ。しかし、季子には通じないものである。通じないのを承知で、無理強ひをするのだ。季子はだまつた。いよいよ面を伏せて、敵意をしめすやうであつた。妻も、妻の姉もしじゆう無言だつた。

「仙哉のやつたことはたしかに悪い。だけど仙哉だけを責めるわけにはいかない。仙哉をさうさせた一部の責任は、妻にもある」さういふのが、長姉の意見であつた。

かつて仙哉が私の妻にぐちつたことがある。

「うちでごろんと横になつてゐると、すぐ風邪をひいてしまふ。が、もうひとつの家で横になつてゐても風邪をひかない。いはれなくとも、毛布かふとんをかけてくれるからです」

仙哉の妻が仙哉に對してわざと冷淡にふるまふといふのではなかつた。季子

には氣がつかないのである。惡氣があつてのことではない。が、仙哉の心が妻から次第にもうひとりの女性にうつていつた隱微な過程が、私に納得できるやうな氣がする。しかし、大ていの場合男はさういふものである。あまりしばしば利用された口實なので、その口實が眞實であつても、何となく手垢のついた理窟になつてしまふ。

「仙哉のいひ分は、わがままだ。仙哉にはどちらの家庭も解消する心がない。どちらも自分には大切だ。これから大切にしていきたいと主張する。どこの身上相談でも、仙哉のいひ分はみとめられないだらう。男のわがままだ。なぐりつけてやりたいぐらゐのわがままだ。しかし、それほどのわがままゆゑ、私は逆にみとめてやりたいのだ。當然仙哉はそれだけのことをあんたにするだらう。しかし、それではあんたの氣がすまないのは當然だ。妻の立場が無視されるのだ。しかし、世間なみに解決をつけるといふことが、はたしていちばん賢明だらうか。それで一應あんたの立場がまもられたとしよう。そのためあの女

の子が死ぬやうなことになる。女の子が死ねば、仙哉とその女とのあひだも自然と冷却し、それをきつかけに別れてしまふことになる。さうなれば、あんたの思ふつぼだ。しかし、それであんたは安堵できるのか。あんたの安心のためには、ひとりの女の子が犠牲となつた。仙哉は生涯そのことをわすれないだらう。あんたの性格とすれば、おそらくあんたもそのことをわすれないだらう。何かにつけて仙哉の罪を小突きまはすことになるだらう。罪は仙哉が蒔いたのだといつて、仙哉ひとりを責めたてる。形は一應あんたの思ふやうに戻つても、夫婦の心は陰慘となる。そしてあんたたちはその陰慘を生涯ひきずつて生きていくことになるのだ」

解決のつけやうのないことに、無理に解決を押しつけようとする私。強引さが胸の中でかわいた音をたててゐた。はじめから季子を説得できるとは思つてゐなかつた。ただ押しつけるだけである。女の子をみてゐるだけに、たしかに私は感傷的になつてゐた。私はこの事件を善惡の基準でわりきりたくなかつた。

そんなものでは解決はつけられない。善惡の判斷は一部分の解決にはなるが、その線からはみ出すものの方が多いのだ。しかし、季子の求めてゐるものは、わかりのよい解決である。蛇のなま殺しのやうな解決をもとめてゐるのではない。季子のは、世間に通用するものである。私の押しつけるものは、世間にかつてはもらへない性質のものである。

「お義兄さんのおつしやることがわからないではありません。でも、よく考へてみたいと思ひます」

「あんたにお願ひしてゐるのだ。結果においては仙哉の浮氣をみとめろといふことになるが、女の子の運命を考へてほしいのだ。無理を承知で、目をつむつてくれとたのむのだ。それだけに仙哉にも責任をもつてもらふ」

うまく引導をわたしたことはならなかつた。かへつて季子の苦惱を押しひろげたやうである。私たち夫婦がこの事件をどうみてゐるかといふことを知らせただけになつた。季子がかへつていくと、息ぬぎのため私は部屋を出た。あ

とにのこつた妻と長姉との會話がきこえた。

「私は、斷じて仙哉の女には會ひませんよ。その女の子にも絶対に會ひませんよ。會へば、その母親と子を私がみとめたことになりますからね。仙哉の妻にもいひたいことはありますが、そんなことは私がいふべき筋合ではありませんからね」

長姉がこの事件で何の報告もうけてゐなかつたことに氣を悪くしてゐるのは、よくわかる。そのためこの事件には觸れたくない立場を主張する。見ざる、聞かざる、いはざるで傍觀がしてゐたいのだ。さういふ立場もある。私の勸告がまちがつてゐただらうか。仙哉に女の子が生まれたことを、その女の子を中心に私たちの問題にしようといふのがまちがひだらうか。好むと好まざるとにかかはらず、問題としなければならぬのではないか。長姉の立場を私はうらやましいと思つた。食堂の椅子にかけて、ほんやりと庭の池をながめてゐた。池の水はいつかの颱風から藻をとかしたやうな不透明になつてゐた。子供